

## 異文化理解研修（ロシア）参加者レポート 2013

総合政策学部 1年 竹迫 顕史

私は8月2日から31日までロシアのウラジオストクにあるロシア海洋国立大学で異文化理解研修を行いました。1か月間にこの研修を通して、私は多くの異文化に触れることができました。ロシアで生活して一番強く感じたことは、日本で培われてきた常識が通用しないということでした。「日本の常識は世界の非常識。」、かつて世界に出ていた人が話してくれた言葉です。言葉自体は極端に聞こえるかもしれませんが、しかし、あながち間違いではないということを私は体感してきました。例えば建物についてです。ウラジオストクの街には建築中のコンクリートがむき出しの建物がちらほらありました。これについては日本と同じです。大きな建物だなあ。どんなビルが完成するのだろうか。毎日少しずつ完成に近づいていく姿を日本では見ることができます。しかしロシアでは違いました。コンクリートむき出しのその建物は何年も前からその状態だったのです。工事は続いているはずなのに全く完成どころか進む兆しを見せないのです。これにはいくつかの理由があるらしいのですが、その理由が日本では絶対にありえないようなものだったので、とても驚きました。



▲灯台



▲環太平洋文化

まず、建築を依頼された責任者による建築費の持ち逃げです。犯罪です。日本だったら、いや日本じゃなくても確実に逮捕されます。工事も責任者と費用を同時に失ってしまったら進はずがありません。仕方なしに新たな責任者を呼んでまた同じように建築費の持ち逃げがおこることがあるそうです。これでは誰を信用すればいいのか分かりません。他の理由として労働者のモチベーションの問題が挙げられます。ロシアにも夏はあります。そして、もちろん暑いです。そんなとき日本の労働者はどうでしょうか。汗水たらしながら必死に働

きます。しかし、ロシアでは違いました。暑いときはどうするか。答えは簡単、働かないのです。全く働かないというわけではなく、暑い昼間は休み、夕方涼しくなってから働き始めるようです。このようなところに、ロシア人のおおらかでマイペースな性格を見ることができました。けれど、暗い中、作業を行っても効率よく出来るはずもありません。結果として工事は進まないのです。ここで面白い話を聞きました。ウラジオストクには金角湾という大きな湾があり、そこに橋を架ける計画が行われました。橋の工事も最初はマイペースにゆっくり進んでいました。そこへある日プーチン大統領が視察に訪れたそうです。



▲ビターリッヒ・アルトビッチ

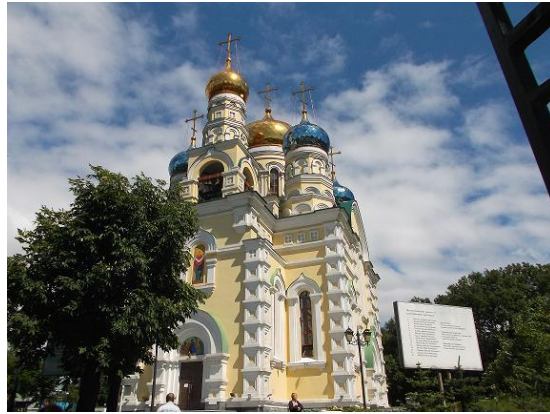


▲要塞

すると、その日から、以前の何倍ものスピードで工事が進み、急激に橋は完成していったそうです。この話を聞いて、ロシア人はモチベーションさえ上がれば凄まじい力を発揮するのではないのかと思いました。それと、絶大は影響力を及ぼすプーチン大統領の凄さもうかがえました。他にも、日本ではありえないようなことが多々ありました。まず。自動車の駐車マナーの悪さです。駅前でも中央広場でも、街の通りでもスペースさえあればどんなところにでも車が置いてありました。最初見たとき、ここは駐車場なのかと思うほど堂々と停めてあったのです。最低限ほかの車が通れる程の道幅を空けているあたり少しは気を使っているのだと思います。駐車マナーだけでなく運転マナーも目を見張るものがありました。自分が見かけたスクーター運転者の半分以上はノーヘルで、しかも二人乗りの率もかなり高かったのです。とても免許を持っているようには見えない子供も自転車感覚で運転しているから驚きでした。警察はというと知らん顔。目の前のノーヘルを何事もないかのようにスルー。ロシアというのは本当に自由な国なのです。交通ルールで悪い面ばかり挙げましたが良い面で驚かされたこともありました。ロシアでは日本と比べて極端に信号が少なく感じます。もちろん横断歩道もです。ならどのようにして反対側の道へ渡るのか。車道を無理やり突っ切るのです。



▲終わらぬ工事



▲大聖堂

最初にこの光景を見たとき私は唖然としました。車が迫ってきているのにおばあさんが突然車道に飛び出したのです。車は急停止しましたがおばあさんは動じずマイペースに道を渡っていました。運転手も全く怒り出す様子を見せずに去って行きました。ここでもやはり私の中の常識が覆されました。これがロシアなのかと。その後自分も道を渡ることが何度もありました。最初は少し怖気づいて進めなかったのですが、そんな自分を見かねてか走っている車が止まって道を譲ってくれたのです。そんなことが一度や二度ではなく、私が道を渡るときはほぼ必ず止まってくれました。いかつい面構えのおじさんも早く行けと急かすジェスチャーを見せながら止まってくれました。ロシアでは当たり前なのかもしれませんが、ここは日本ではないのです。異国の地でこのような小さな優しさに触れるととても大きな幸せのように感じました。制限速度は守らない。駐車マナーも悪い。けれども、歩行者に道は譲る。一見クールだけど中身は温かい、これがロシア人なのだと私は思いました。次に驚いたことが、バスに時刻表が無いということです。北バスに適当に載るのです。日本では時刻表に沿ってバスが運行され、それを基準に人々は乗る時間を決めスケジュールを作っていくものだと思います。しかし、ロシアのように時刻表が無いのではいつバスが来るのか分からない。そうなれば行きたい場所に着く時間も不明なのでしっかりしたスケジュールが組めない、というのは日本人的思考なのかもしれません。ロシア人は時間にルーズだという話をよく聞きますが、その片鱗を見たような気がしました。他にも色々なロシアの文化を体験してきました。





▲最初のリボルバー



▲会話の授業

このように異文化を肌で体感することによって私は無意識のうちに日本とロシアについて比較しているのだと分かりました。異文化を理解するということは他国の文化を知るだけでなく、より深く自国の文化を理解することが出来ます。比較していく上で相手側を偏見で見るのではなく素直に受け止めることも重要です。そうやって相手を知り自分を見つめなおすことで視野が広がり、より人間として成長していくことが出来るのではないかと私は思います。

研修中のロシア語の講義についてはかなり苦労しました。文字通りロシア語の右も左も分からない状態だったので、最初は皆お手上げ状態でした。しかし、先生の熱心な指導によってだんだんと雰囲気はどういうことを伝えたいのかを読みとれるまでに至ったと思います。私たちが聞き取ることのできるようにゆっくりとジェスチャーをまじえ分かりやすく発音してくれたり、繰り返し単語を言い続けてくれたので少しずつ内容を覚え、なんとかやっていくことが出来ました。先生方には本当に感謝しています。私みたいな生徒にも根気強く教え続けて下さったのですから。



▲デパート隣の市場

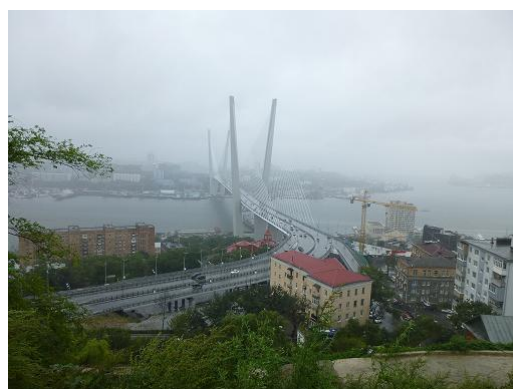


▲寮の様子

授業は1限と2限に分かれており1限は文法、2限目は会話の練習をしていました。文法は授業が進むにつれてどんどん難しくなっていました。ロシア語は世界一文法が難しいと言われています。例えばロシア語の動詞は主語によって様々な形に変化します。名詞や形容詞も文の役割によって変化します。一つ一つ覚えていかなければならずとても厄介です。正直全く内容を理解できずに授業が終わったこともありました。その日に限って課題を多く出されたりもしました。そんな時に頼りになったのが他の留学生たちでした。ロシア海洋国立大学には様々な国から留学生が集まっていて共に寮で生活していました。この夏には韓国やベトナム、北朝鮮からの学生もいました。特に私たちは韓国の留学生とよく交流させていただいて、課題を確認してもらったりと、とても助けてもらいました。彼らの中には日本語が話せる人も数人いてとても心強い存在でした。他の国の学生と交流することでロシア以外の文化にも触れることが出来たのでとてもよかったです。寮の6階には卓球台が置いてあり、そこで時々韓国の学生と卓球をして遊んでいました。遊びながらいろんな話をしていました。韓国では高校の時から第二外国語の授業があるらしくそこで日本語を学ぶことが出来るそうです。韓国の国際化への力の入れようは凄いと思いました。他にもリアルな兵役の話など日本で普通に生活していたら聞くことのできないようなものもあり実に興味深かったです。



▲ボルシチ最高



▲ロシアの街並

しかし、やはり一番話していて盛り上がったのは日本のアニメや漫画のことでした。アニメはバンコク共通でとても話が弾む日本の誇るべき文化だと思いました。そんな感じで異例の文化交流もあり充実した毎日を送っていたら、あっという間に1か月は過ぎ去ってしまいました。今までの人生で一番充実した8月だと言えるでしょう。終わってみればロシア語を聞き取る能力は行く前と比べて確実に上がったと思います。聞き取るだけで理解までは難しいのですが。それでもこの8月以前はロシア語の能力がほぼゼロだったのでそれと比べると、研修を通して多くのものを吸収し身につけた今では少しは成長できたのではないのでしょうか。

今後の留学、学習、国際理解への意欲については、よりロシア語をきわめていきたいと考えています。かなり難しい言語ですが、それだけやりがいがあると思います。そのため

に将来的に長期の留学もしたいと考えています。今度行くとすれば事前にもっと勉強しておいて、より一層実り多いものにしていきたいと思います。いつかもっとロシア語を話せるようになってウラジオストクに戻り、お世話になった先生方にロシア語で感謝の気持ちを伝えられたらそれはとても素敵なおことじゃないかなと思います。この経験を単に思い出として終わらせるのではなく、将来のために活かしていけるようにしたいと思います。